**読書ノート　その31**

令和元年6月22日　小林

**竹村牧男「入門　哲学としての仏教」（講談社現代新書、2009年4月）**

* 1948年生れ、元筑波大教授、現東洋大学長。唯識思想、華厳思想、禅思想等の研究。著書多数。
* 本書は哲学のさまざまな分野について仏教はどのように考えているかを平易に解説したもの（とは言え難解）。章だては以下の通り。存在について／言語について／心について／自然について／絶対者について／関係について／時間について／結語－哲学としての仏教への一視点。
* なお、以下の要旨では、仏教用語や経典名、書籍名、著者名はほぼすべて省いた。カント、ウィトゲンシュタイン、ヒューム等々の西洋哲学との共通点・相違点についてもほぼすべて省略した。
* **まず、仏教の基礎。**仏教の創始者は釈尊（本名:ｶﾞｳﾀﾏ･ｼｯﾀﾞｰﾙﾀ）、インド北部のシャカ族の出身であることから釈迦（ｼｬｶ）とも呼称され、釈尊は尊称、釈迦牟尼はシャカ族の聖者の意味です。目覚めた人・悟りを開いた人の意味でブッダ＝仏陀とも呼称される。紀元前463年生まれ～前383年没、享年80歳。
* 釈尊が説いた教えは原始仏教といわれ、阿含経という漢訳経典にまとめられている。釈尊の死後100年ほどで教団は20ほどの宗派に分裂（これを部派仏教という）、その後、紀元1年前後に大乗仏教が登場し、これが中国を経由して日本に伝来した。これを北伝仏教ともいう。この大乗仏教に対して部派仏教は東南アジア諸国に広まり、これを小乗仏教または南伝仏教という。小乗仏教は出家者自身の悟りを究極の目標とするのに対し、大乗仏教は出家者のみならず在家信者の救済をも究極の目標とする。なお、竹村は、小乗仏教を「ある意味」オーソドックスな仏教であると言っている。
* 七世紀ごろ大乗仏教から密教がわかれた。密教は釈尊を超える根本的な大日如来という絶対神的な存在を想定し、その大日如来が説いた教えこそ真理だとする仏教の一宗派。空海・最澄により800年代初頭に中国から日本にもたらされた。空海の広めた密教は真言密教（高野山金剛峰寺）、最澄の広めた密教は天台密教（比叡山延暦寺）。密教は、自宗派以外の大乗仏教諸宗派（浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗等々）を顕教と呼んでいる。「密」は真の教えは隠されている（文字によらない教えがある）という意味で、その隠されている（密ﾋｿかにされている）教えを明らかにしなければならないとする。「顕」は文字＝経典に表（顕）わされているという意味で、経典にはすべての真理が書かれているとする。
* 以上のとおり、仏教は大別すると、原始仏教・部派仏教（小乗仏教）、大乗仏教（顕教）、密教となる。なお、日本の仏教は大乗仏教系＝浄土真宗、曹洞宗、日蓮宗等々、密教系＝真言宗、天台宗である。
* ちなみに、唯識論を教義とする法相宗（奈良・興福寺）は、西遊記に出てくる玄奘三蔵（三蔵法師）が645年にインドから中国へ伝えた。日本への伝来は、遣唐使（630年～894年）による。唐に渡った日本僧が玄奘三蔵から直接教えを受け、それを日本に持ち帰ったことが起源となっている。
* なぜ仏教は哲学的なのか？　仏教は自己の救いを求めるもの。それを追求していくためには、自己とは何なのかを知らなければならない。ここから仏教は哲学的思考をすすめていった。竹村いわく、神を信じることだけが宗教ではない、自己究明の道も宗教である。だから、仏教は宗教であり哲学である。
* **存在について。**モノが存在するとはどういうことか？ 今、テーブルがここに存在するが、テーブルは木材等の素材でできており、木材等の集合体に過ぎず、それを構成している要素を追求していけば分子・原子や素粒子やさらなる究極の粒子に行き着くかもしれない。そうなると、テーブルがあると言えるのだろうか。それ自体としての本体を持ち、不変であり、その意味で「ある」といえるモノはどこにも見出せないのではないか。
* 人間も同じである。人間は年老いていく。細胞は入れ替わり、心には情念がつぎからつぎへと湧いてくるばかり。変わらないものなど見いだせない。変わらない自分などありえようか。刻一刻と変わっていくモノがそこにあるとしても、それを「ある」と言えるのだろうか。
* それでは、何があるといえるのだろうか。そこでまず仏教は、物も心も現象であるととらえる。すなわち、物と心を別々のもの・対立するもの・相反するものととらえず、どちらも現象であるととらえる。この現象世界の実質をたしかに担っているものこそが「ある」と言えるのではないか。竹村はこれを「自分自身を保つもの」と説明しており、それは「ダルマ」・「法」と言われているものである。ちなみに、法律は社会の秩序を保つので、法律もダルマである。自然法則も宇宙を保つので、ダルマである。仏教は、変化する現象のなかで、自分自身を保ちつづけて変わらないものを探求し、それをダルマと呼んだ。すなわち、ダルマとは世界の構成要素である。この構成要素の探求の結果、得られた成果をアビダルマという。
* アビダルマの一例として最もよく知られているのは、説一切有部（小乗仏教の代表的宗派）が唱えた五位七十五法。世界の構成要素は75あり、それは5つに分類されるというもの。五位とは、(1)色法－物質的なもの、(2)心王－心の中心・主体、(3)心所有法－心に付随するさまざまな心、(4)心不相応法－物でも心でもないもの、(5)無為法－現象を超えた変化しないもの。この五位のもとに、75の世界の構成要素＝法・ダルマが列記されている。（詳細は大草さんの論文参照。ただし、五位百法です。）
* たとえば、(1)色法。これは、物質的なものを言っているが、11の構成要素に分かれている。

(1)五つの感覚＝眼識・耳識・鼻識・舌識・身識

(2)五つの感覚器官＝眼根・耳根・鼻根・舌根・身根　　　　　11の構成要素＝法・ダルマ

(3) 最後の一つは、無表色という目に見えない物質

* この色法＝11の構成要素で我々は物質的なものを認識している。たとえば、リンゴは眼で見た形・色、手でさわった手触り感、舌で感じた味の三つの感覚を総合してリンゴと認識している。リンゴはリンゴと認識されているのではなく、独立した三つの感覚の総合としてリンゴと認識されている。そこには、物質としてのリンゴ自体はなく、形・色、手触り感、味という意識しかないのである。すなわち、物体があるから感じるのではなく、感じるから物体があるのである。つまり、物体は感覚の中にしかないのである。
* それでは、このように存在をとらえる仏教の世界観はどのようなものなのであろうか。ひと言で言えば、関係論的世界観。すなわち、因・縁・果という因果関係が世の中を作り、世の中を動かしていると考える。因とは、直接的な原因、縁とは間接的な条件、果は結果。この因・縁・果は、五位七十五法において6つの因・4つの縁・5つの果に分析・分類されている。たとえば、タネから花が咲くのは、

同類因（タネ）－－>等流果（花）

という因・果の関係であり、与えられた肥料は増上縁と言われる。

同類因－－>等流果

　　　　↑

増上縁（肥料）

* そのほかに、異熟因－－>異熟果や相応因－－>士用果などの因果関係もある。なお、同類因や等流果、異熟因等々は世界の構成要素＝法・ダルマであり、仏教の世界観は法・ダルマの縁起（関係性）によってこの世の出来事を説明しようとするもの。
* 以上述べてきたのは、小乗仏教の説一切有部という宗派の考え方。それでは、大乗仏教はどのように考えているのだろうか。まず、法・ダルマそれ自体の存在を否定し、そのうえで法・ダルマも縁起においてはじめて成立するものと考えた。存在するのは、実体なくして現象のみであり、それらは仮にある（仮象）のみであるとする。これは、せんじ詰めれば「色即是空・空即是色」の空の思想である。法・ダルマも仮象として存在すると考えた。
* 大乗仏教の世界観は、世界は実体のないもの＝心に映る現象のみで成り立っているとする。
* 大乗仏教では、この空の思想にもとづき小乗仏教の五位七十五法を再解釈して五位百法に拡大した。
* **言語について。**　唯識思想は言語を分析し解体し、その解体しつくされたところに真理を見るのである。それではまず、「牛」という言葉は何を表すのだろうか考えてみよう。
* この世界には茶色の牛、白黒の牛、子どもの牛、親の牛、等々さまざまな牛がいる。どんな牛も含む「牛」というものは実際に存在するのだろうか？ 茶色でもあり白黒でもあり子どもでもあり親でもあり・・・・・でもある牛という動物は存在するのだろうか？
* このように考えると、「牛」という言葉は概念を表すだけで、牛という具体的な存在を表していない。「花」も同じ。「この花」「あの花」と言えば具体的な存在を表すが、「花」だけでは概念しか表していない。
* インドのディグナーガ（480～540年頃）によれば、単語は「他の否定」にすぎないとのこと。つまり、「牛」は「牛以外の動物ではない動物」を意味しているだけ（animals other than animals not being cows）。すなわち、他の動物があってはじめて牛というモノを言い表すことができる。
* 換言すれば、名詞が表すものは、自存的実体存在ではないということ。要は、他者との関係性において自己が存在しうるということ。ここから、法・ダルマの無自性＝空ということが言えるのである。他者がなければ自己は存在しえない。だから、自己の存在それ自体は空なのである。
* そうすると、牛という存在が外界にあるから我々はその存在に「牛」という言葉を作って当てはめたわけではなく、我々の心に映ったモノ（五感で感じたモノ）に対して言葉を作って当てはめている。しかも、五感で感じたモノは刻一刻変化する。今見ている牛は刻一刻年老いていく、体重は増加・減少し、体毛は生え変わり、いつか寿命を終える。であれば、言葉は変化するモノを固定的にとらえており、しかしながら、その牛は決して固定的な存在ではない。
* 要するに、我々は、二重否定でしかありえない言葉を使って、そこにいる刻一刻変化する牛を固定的な牛として存在していると認識している。これは錯覚でなくて何であろうか。と竹村は言う。
* このような思索から、大乗仏教の唯識思想が生まれた。この唯識思想は、心が「感覚している・知覚している」という行為、すなわち「何々している事」（見える・聞こえる・匂う等）により世界を認識しようというもの。事（コト）的世界観である。したがって、唯識というより唯事と言うべきである。
* さて、上記のように、我々は我々の心に映ったモノ（五感で感じたモノ）に対して言葉を作って当てはめているが、これは換言すると、意識が五感に対して言葉を適用しているのである。このような経験は意識下にある阿頼耶識（潜在意識）に保存され、その後、その意識の言葉による分節（意味）に見合うあり方で諸感覚が生起してくるのである。つまり、言葉が世界を作り上げているのである。幼児の世界認識のし方はまさにこういうことではないだろうか。
* 唯識思想は言語についてさらなる分析を加えている。「私は何々を見る」という文章は成り立たないと言う。ここに出てくる「私」は、「見る」という行為をおこなう以前に存在していなければならない。そういう「私」でなければ、「見る」という行為は行えない。しかし、ここに出てくる「私」は、まだ何も見ていないし、何も聞いてもいない、何も触っていない。つまり、そのような「私」はなんら現象にかかわっていないのである。そのような「私」の存在をどうやって知ることができるのだろうか。
* 「自動車が走る」（A car runs.）という文章は何を意味しているのだろうか？ その自動車が止まっているなら、止まっている自動車は、止まっているのであるから、走らない。止まっている自動車は止まっているのである。それでは、走っている自動車が走るのだろうか？ 走っている自動車がさらに走るなどということはない。であれば、「自動車が走る」と言うことは可能なのだろうか。
* このように唯識思想はあらゆるタイプの文章の矛盾を突いて言語を解体し、解体されつくしたところに究極の真理があると言う。（その真理を第一義諦（ｷﾞﾀｲ）or勝義諦（ｼｮｳｷﾞﾀｲ）と言うが説明省略。）
* **心について。**唯識思想は意識下の世界を究明し、理論化している。まず、心を八つの意識に分析している。すなわち、
* 眼・耳・鼻・舌・身（以上、五感）－表層的な感覚
* 意識（第六識）－考え、思いなどの意識的な心の働き
* 末那識（マナ識）－自我への執着
* 阿頼耶識（アーラヤ識）－潜在意識
* 末那識とは、自我に執着する心である。たとえば、人が善意で他人に親切にしていても、常に自我に執着する心（我執）がありつづけると言うこと。どんなに立派な人であっても煩悩から離れられない。
* それでは、末那識は何を自我と見なすのだろうか。末那識の下にある阿頼耶識のその主観的側面がたえず生起してくるのであり、それを末那識は対象（拠り所）としつつ、自分自身の識の中に常住の我のイメージを浮かべて、それに執着するのだ。つまり、本来、主体であるところの根源的な命（いのち）をあえて対象化し固定化して、それに執着し縛られるのである。これが我執である。
* 阿頼耶識とは、心のもっとも奥にある潜在意識のこと（アーラヤとは蔵の意味）。そこには過去に経験した一切の情報が蓄積されている。その過去は輪廻転生して経験したすべての過去である。
* 阿頼耶識は、善を行えばそれを蓄え、悪を行えばそれを蓄える。善の蓄積と悪の蓄積の比率がその人の人生に何らかの影響を与え、死後の輪廻転生する世界を決める。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道輪廻である。さて、阿頼耶識の中の悪の蓄積は蓄積されたらもうどうしようもないのであろうか？ 意識・第六識により浄化できるとのこと。ここでは縁も必要。善友を得たとか、仏教の本を手にしたとかの縁が必要。浄化された悪の蓄積は智慧に変わる。
* なお、唯識思想よりもさらに人間の意識を掘り下げて探求したのは、如来蔵思想である。すなわち、第九識があるとのこと。これを阿摩羅識（or無垢識）と言う。自性清浄心とも言う。仏の心そのものである。仏性である。仏性はすべての人が持っているのであり、これは大乗仏教の人間観である。一切衆生、悉有仏性（生きとし生けるものは悉く仏性を有している）。だからだれでも成仏できる。仏道はその仏性＝自性清浄心を磨きだす道筋ということになる。
* さて、心とは何かについて華厳思想は、唯識思想をさらにおしすすめている。その説によれば、心とは現実世界そのものであると言っている。どういうことか？ 感覚・知覚等々の心を掘り下げていくと、その現象としての心の本性である真如にまで達し、その真如とは空性そのものであるがゆえに、かえって自らを否定して現象世界を成り立たしめていることを見ることにある。？？？
* 換言すれば、心というものを考えるとき、「物に対する心」という想定をして、心を対象化することをやめなければ本当の心は見えて来ないということ。心を対象化するのをやめれば、「心に対する物」ではなく、自己が無限の関係性の中に組み込まれていて、その世界全体が自己であることが見えてくるであろう。
* **自然について**。現在の環境問題の解決のためには、新たな人間観・世界観にもとづく哲学・倫理を確立しなければならない。このためには、
* 環境をどのようなものと見るのかという哲学（エコソフィ・環境哲学）、と
* 倫理を実践する主体であるところの人間とはどのような存在なのか

を明らかにしなければならない。

* 仏教の縁起思想は、人間を含めすべてのモノを関係性の中でのみ存在可能と見る。ここから、関係性を持たない個々のモノそれ自体は空（虚像、仮像、本体のないモノ、無自性）であると見る。
* さらに唯識思想は、まずあるのは心（識）であり、その中に自己の身体と環境とが維持されていて、そのうえで見たり聞いたり、環境への働きかけがなされている。それらすべてを含んだ総体が自己であると理解する。これは、阿頼耶識の中に器世間（キセケン）＝生き物を入れる器としての世界があるとする考え方に表されている。
* 人間の身体は環境と循環・交流してはじめて生命を維持できる、身体と環境はセットとしてとらえ、そこに一個の生命を見出すべきである。この仏教の思想は今日、再評価されるべきである。と竹村は言う。（人は生きているのではなく、環境との関係性の中で生かされている、ということか？）
* さて、華厳思想はこれをさらに推し進める。ふつうの大乗仏教は仏を三身と見る。すなわち、
* 法身＝絶対者的な存在としての仏
* 報身＝智慧そのものとしての仏　（智慧とは、道理を見極める心の作用）
* 化身＝その智慧が人間に見える形で姿を現したもの

である。

* これに対し、華厳思想の十身論は、仏の存在を十の身体を持ったものとして見る。その十身は、衆生身・国土身・業報身・以下略であるが、これは仏の中には自己と他者と環境のすべてが包含されているという考え方。（要は、悟りを開いた人＝仏の心の中をどこまでも探求していくと、そこには宇宙全体が存在しているということ。微小の中に極大が入り込んでいる。ビッグバンの原始状態のようで興味深い。）
* 次に、天台思想の「草木国土、悉皆成仏」の背景にある考え方を見ていこう。
* なお、11世紀末～16世紀末にかけて、この言葉をめぐって人間と自然との関係について非常に深い哲学的な議論がなされていたことを今の日本人は知っておくべきだ。と竹村は言う。さらに、竹村は、円仁・円珍・五大院安然・良源・源信は偉大な思想家・哲学者だが、今の日本人は知らない、と嘆いている。
* さて、この言葉の意味するところは、(1)自己と環境とは平等一体の本性に貫かれている、(2)その本性が智慧（道理を見極める心の作用）そのものであるとき、そこにおいて自然界のあらゆるものが成仏しうることになる、(3)自己と環境とは空性という本性において一体である。
* 我思うに、仏教は自己の心の中に自然環境全体があるととらえており、このことは、華道や盆栽の思想と共通するものがあるのではないか。華道や盆栽も大自然を小さな花々、木々で表現するものであり、これによりソトにある大自然を家屋のウチの中に取り込むものである。仏教の影響を感じる。

以上